



川崎市有馬上空から見た港北ニュータウン予定地(昭和53(1978)年)(独立行政法人都市再生機構提供/横浜市都筑図書館所蔵)

新しいまちをつくる / 六大事業と緑

昭和30年代の横浜は人口の急増と乱開発が問題になる一方で、中心市街地の復興は遅れ、都市の基盤施設の整備も不十分でした。このような中、市では昭和40(1965)年に「六大事業」をスタートさせます。六大事業は、特定の基幹的事業を選定し、それらを戦略的・重点的に遂行することで、都市全体の基盤と骨格を整え、健全な都市としての発展を図る大プロジェクトで「都心部強化事業」「港北ニュータウン事業」「金沢地先埋立事業」「高速鉄道(地下鉄)建設事業」「高速道路網建設事業」「横浜港ベイブリッジ建設事業」からなっていました。中でも港北ニュータウン事業と金沢地先埋立事業はその後の計画的なまちづくりにおける緑とオープンスペースのありかたに大きな影響を与えました。

港北ニュータウン事業は乱開発が進む中で先手を打って計画的なまちづくりを行うもので「乱開発の防止」「都市農業の確立」「市民参加のまちづくり」を

基本理念として「グリーンマトリックスシステム」「農業専用地区」「申出換地」といった新しい仕組みを導入し、緑豊かで魅力的なまちをつくり上げました。

一方、金沢地先埋立事業は、六大事業のひとつである都心部強化事業に伴う市中心部の工場移転用地造成を主な目的として進められました。

金沢地先は当時の横浜に残されていた最後の自然の海岸線でしたが、既に民間会社が埋立てを計画していたことから、市が総合的な視点をもって事業を行うこととしました。

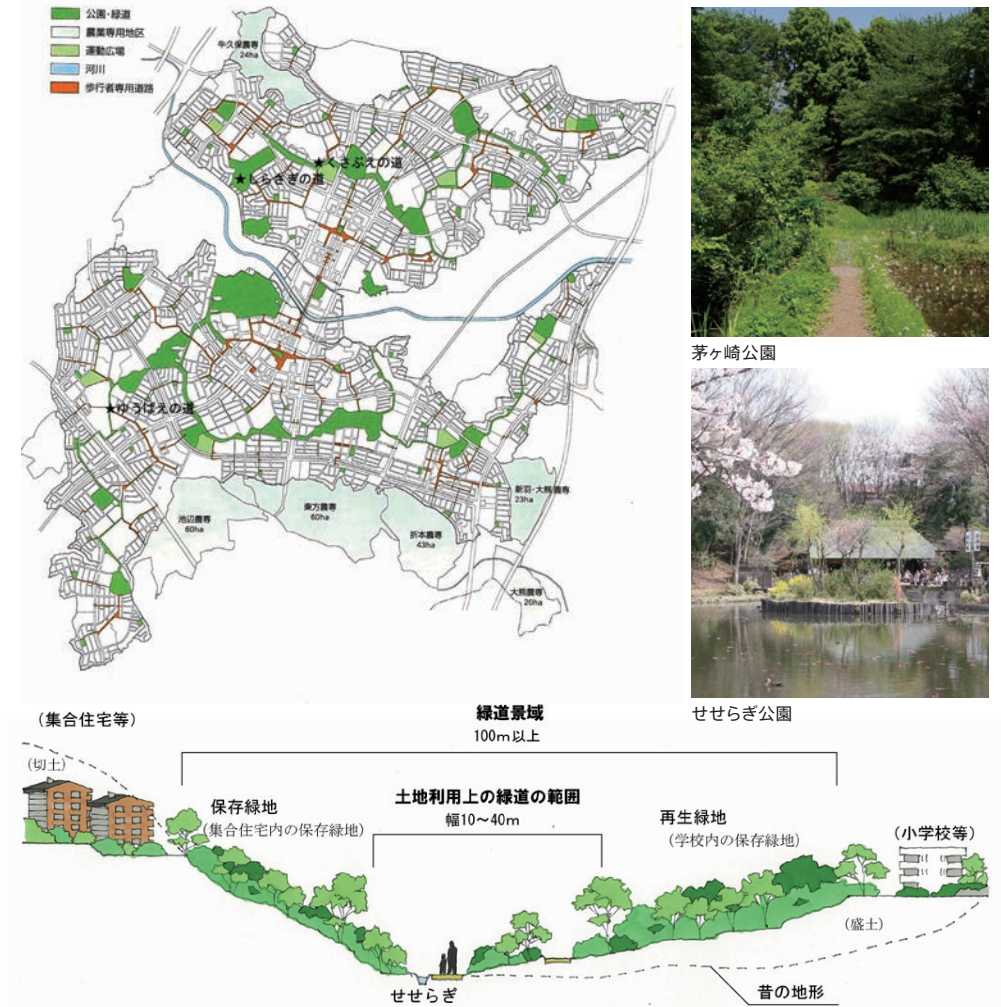
埋立地には、移転した工場が立地する工場地区と、そこで働く人々のための住宅地区「金沢シーサイドタウン」が配置され、職住近接のまちづくりが行われました。また、失われた水辺を復元するため、浜辺のある海の公園、人工島(現在の八景島)が配置されました。さらに、周辺の農地は柴シーサイドファームとして整備され市民が農に触れ合う場となっています。

グリーンマトリックスシステム

港北ニュータウン(都筑区)のまちづくりの大きな特徴は、造園家の田畑貞寿の提案による「グリーンマトリックスシステム」です。これは地区内の緑道を主骨格とし、そこに公園緑地や歩行者専用道路等の公共の緑、集合住宅や学校、企業用地等の民有の保存緑地や、遺跡、水系等を連続させ、農業専用地区をモザイク状に配し、地区の空間構成の要としたものです。

骨格を形成する緑道は5系統あり、主としてかつて谷戸であった位置に設けられ、総延長は15kmにもなります。緑道自体の幅は10~40mですが、緑道を中心として集合住宅や学校等の保存緑地が配置され、これらを含めると幅が100m以上にもなる広大な緑地空間となっています。また、谷戸の景観を再現するため「せせらぎ」や「池」も配置されています。緑道は主要道路と完全に分離され、歩行者は車道と交差することなく安全に利用することができると同時に、災害時の避難路としても機能します。

グリーンマトリックスシステムによって、現在も港北ニュータウンは質の高い住環境を保っています。



出典「港北ニュータウンGREEN MATRIX SYSTEM グリーンマトリックスシステムによる緑の保全と活用」独立行政法人都市再生機構作成



港北ニュータウンと農業専用地区

横浜市の特徴的な都市農業施策である「農業専用地区(P16)」は港北ニュータウン計画とともに誕生しました。

昭和43(1968)年に「港北ニュータウン地域内農業対策要綱」が制定され、地元組織との度重なる協議の末、集合農業用地を希望する地権者を集約し、昭和44(1969)年に6地区230haの農業専用地区を指定し、振興策を展開しました。

従来の現位置換地による土地区画整理だけでは困難だった大規模な土地集約を可能にしたのは、地権者が希望する土地を換地する「申出換地」という手法です。この手法はニュータウン事業全体にも用いられ、事業の推進に貢献しました。その背景には農業施策を通して培われた農家(土地所有者)と緑政局との信頼関係がありました。



港北ニュータウン内の農業専用地区

海の公園と金沢緑地

海の公園(金沢区)は、沖合の八景島(人工島)とともに海洋レクリエーション拠点として整備され、昭和63(1988)年に開園しました。砂浜造成は、当時の最先端の知見をもとに勾配や幅が決定され、千葉県山砂110万㎡が使われました。整備後はアサリをはじめとする干潟の生物が自然発生し、現在は潮干狩りシーズンである5月には20万人以上で賑わう、横浜を代表する行楽地のひとつです。

金沢緑地は、職住近接のまちづくりに欠かせない緩衝緑地です。騒音防止、大気浄化等の効果に加え広場や園路を配して市民の憩いの場とすることも目指して整備されました。植栽には地域の気候に適した樹種が選ばれ、今では立派な森となっています。



埋立地上空から見る海の公園と金沢緑地(横浜市金沢図書館所蔵)

柴シーサイドファーム

起伏に富む急傾斜地に小規模農地が点在していた金沢区柴地区では、農家からの基盤整備の要望と、市民が農作業を体験できる場の創出の需要を満たすため、平成3(1991)年から土地改良による基盤整備と、本市唯一の市民農園整備促進法による大型市民農園の整備を行い、平成10(1998)年に農業協同組合(旧JA横浜南)を運営主体とした市民農園、「柴シーサイドファーム」が開園しました。

市民農園の周辺の農地では、地元農家によるジャガイモ掘りやミカン狩りの体験の場の提供や、農産物の直売など、地域ぐるみで農に触れ合える場として市民に親しまれています。



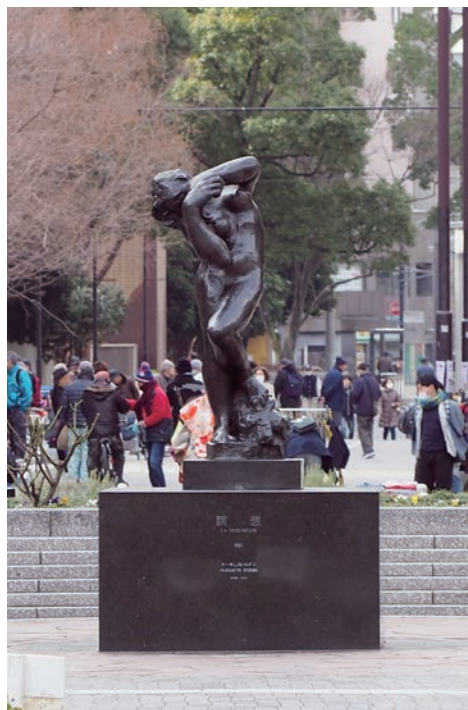
金沢シーサイドファーム

Column 08

「緑の軸線構想」と 変わり続ける大通り公園

大通り公園(中区)は、六大事業のひとつ「都心部強化事業」において、都心部の魅力を高める「緑の軸線構想」の中核となる公園として計画されました。一時は首都高速道路の整備に伴い、公園上部を高架道路が縦断する計画となっていました。また、国との調整の結果、高速道路の地下化やルートの見直しを行い、オープンスペースを確保したもので、昭和53(1978)年に竣工しました。

関内側から石の広場、水の広場、みどりの森の3つのゾーンで構成され、設計には建築家の進藤廉が関わりました。石の広場には屋外ステージがつけられ、スプリングフェアや出初式等のイベントが活発に開催されました。このステージには横



大通公園とロダン作「瞑想」